

## 故 ウォークマン博士の御逝去を悼む

1982年12月27日、あの親日家の Dr. Workman が亡くなられた。83才でした。

先生はニューメキシコ工科大学の総長でしたが、退職後ハワイ大学雲物理研究所の所長として新しい情熱を傾けられました。私が初めてお会いしたのは1969年の夏で、先生のハワイでの生活はすでに五年目に入っておられました。驚いたことに研究所は超一流の金工室を持っており、微気圧・電場・雨量計など、先生独特のアイデアで作った器械が観測に用いられ、M33 レーダーも使用することができました。しかし、あの有名な Workman-Reynolds 効果に未練があるらしく、アイスボックスの中で実験を繰り返し続けておられました。

先生ぐらい自分の感情に正直に生きた人を私は知りません。したがって、先生に会った人は本当に好きになってしまうか、もう顔を見るのもいやだということになってしまうでしょう。

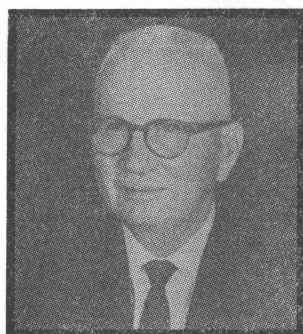
前の奥さんがハワイで亡くなられた当時のこと、助手はいつものように“Good morning Dr. Workman”と挨拶すると“What good about”と答え、それ以来朝の挨拶はなしにしたと助手がいました。

降雨の際、雨滴が正に帯電しているのに電場が負になるのは負イオンが下降気流で雲から地上近くに運ばれるからであると私が主張し、雲内イオン濃度測定を強調しましたが、いつも Dr. Workman と大議論になりました。私が“下降気流”という度に、先生はぶいと室から出て行かれました。

ある時、先生は金工室に入り、朝から夕方まで何か作っておられました。私達は恐いのでなるべく近よらず、他の室にとじこもって仕事をしていたのですが、3日程して先生が“これを使って気球で観測してみなさい”といっ、りっぱな球状のフェラデー・ケージを持って来て下さいました。私は感激しました。感謝して観測に使わせていただきました。

ゴルフが好きでよく出掛けられました。私が“いつ仕事のことを考えるのですか”とお聞きしますと、“ゴルフをしている間いつも考えている。あまり考ええるとスコアが下がるので困る”と言っておられました。

1970年には雲物理研究所からも退職され、カリフォルニアのサンタバーバラに移られました。学会で時々



お会いしましたが、サンフランシスコの IUGG の学会(1977)では最前列に席を取られ、何もいわれないのですが、講演の最中にこぶしで机を叩いたり、足で床をけったり、顔を机にすりつけて眠ったふりをしたりして、一つ一つの講演に身体全体で反応しておられました。

先生はあまり論文を書かれなかった方ですが、観測を通じてよく自然を知っておられ、アルバカーキーの雷の研究(NACA REPORT, 1942)は現在のニューメキシコグループの研究の草分けとなったのです。

IUGG の会議中のある日、二人でレストランで夕食を共にした時、着氷の電荷実験の結果をお見せしたところ、ウェイトレスに“この若い者が、私が一生かかって築いた理論を間違っているというんだ”と笑いながら話され、よく私の研究の話に耳を傾けて下さいました。しかし IUGG の学会が終わると、“あまり着氷電荷実験にかぶれないように、私の理論の方が正しい。”といって、サンタバーバラに帰って行かれました。研究から離れたさびしさは耐え難い御様子でいつも“さびしい”、“さびしい”といっておられました。

イギリスの会議(1981)の後ロンドン空港までお見送りしたのですが、会う人会う人に冗談をいって明るい雰囲気を作っておられました。雷の研究者であることが誇らしい御様子で、話をしていると、高校の先生をしているという人に“あなたがあの有名な Dr. Workman ですか”といわれ、顔面喜々としてギャロップしながら、ふりむきもしないでターミナルに入って行かれました。

“大物”は喧嘩をしても楽しい。そういう人がまた一人この世を去り寂しい限りです。(高橋 劭)